

# 日向方言における「行く」「来る」の 使用状況とその傾向

水 元 愛香里

## 1. はじめに

### 1. 1 研究の動機・目的・意義

日常生活において、私たちは「行く」と「来る」を状況に応じて使い分けている。ほとんどの話者は無意識に「行く」と「来る」を使い分け、どのような基準で「行く」または「来る」を使用するのか深く考えることはない。筆者も特に気にすることなく「行く」と「来る」を使用していたが、大学の講義を受講中に自身の「行く」「来る」の使い分けが他者とは異なることを知った。宮崎県日南市出身の筆者は友達との待ち合わせの際、違和感なく「ごめん、今から来るね。」と言う。これは筆者にとって、ごく自然な発言であり、宮崎県内で生活していた時、家族や周りの友達からこのことに関して何らかの指摘を受けたことはない。しかし、宮崎県以外の地方を出身地とする友達に聞いてみると、遅れて来る人から「ごめん、今から来るね。」と言われると違和感を持つとのことだった。

筆者を含めた宮崎県の人々はどのような基準の中で「行く」と「来る」を使用しているのか、内省のみでは基準が曖昧で定まらず疑問が残った。また、「行く」と「来る」の使い分けについて宮崎県の方言に限定して調査したものは少なく、使用実態が明らかになっていない。そこで宮崎県の人々、そのなかでも特に日向方言を使用する人々のなかに無意識に存在する「行く」「来る」の使用基準、また、「行く」「来る」の使用状況を明らかにしようと考えた。

本研究では、日向方言話者を中心にアンケート調査を実施後、「行く」と「来る」の使用状況、特に「来る」という表現を使用しやすい状況を明らかにし、さらに世代差・男女差による使用状況の差異も明らかにしたいと考える。

### 1. 2 日向方言とは

岩本実(1983)は宮崎県の方言を大きく2つに分けており、それぞれを「日向方言」と「諸県方言」としている。日向方言は昔「日向」と呼ばれた地域の大部分で使用される方言であり、言語的性格として豊前・豊後の方言と似通うところがあることから、合わせて「豊日方言」と称される。日向方言が使用される地域は非常に広く、封建時代に延岡・高鍋・佐土原・飴肥・人吉などの小藩に分かれていたことに加え、長い間、平野地と山岳地帯の奥地との交通が閉ざされていたこともあり、住民の生活圏、またそれに伴う言語が細かく分割される結果となった。日向方言は細かく分かれた小方言の総称であると言え、諸県方言と比べて統一的な色調に欠けるとされている。

(2)



図1 宮崎県方言区画図  
(みやざき ひむか学ネットより)



図2 江戸時代の各藩及び天領の領域図  
(みやざき ひむか学ネットより)

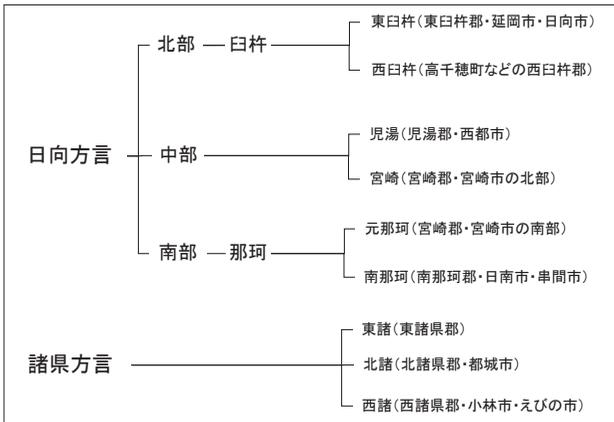


図3 宮崎県の方言区画 (みやざき ひむか学ネットより作成)

## 2. 先行研究

「行く」と「来る」に関する主要な先行研究としては、以下のものが挙げられる。

### 2. 1 陣内正敬 (1996)

陣内正敬 (1996) は、福岡市を中心として使用される肥筑方言における「行く」「来る」の用法について言及している。十数名の面接調査の結果から、「来る」を使用する可能性が高くなる要因を〈状況的要因〉〈心理的要因〉〈スタイル的要因〉の3つに分ける。

しかし、その問題点を次の大城玲奈 (2015) によって指摘されている。

## 2. 2 大城玲奈 (2015)

大城玲奈 (2015) は、久野暲 (1978) と陣内 (1996) の「両者を比較し、視点の捉え方にどのような相違点があるのかを明らかにし」ようと試みている。「方言話者にとってどういう関係の人やどの程度の距離・時間が「近い」と捉えられ「来る」が用いられるのか」について、陣内 (1996) が明らかにしていないと指摘。肥筑方言における「来る」の使用実態についてインタビューし、〈時間的観点〉〈人間関係の観点〉〈距離的観点〉から「来る」を用いる条件となる「近さ」の程度を明らかにしようと試みている。

しかし、インタビュー調査によって使用実態を把握しようとしているものの、インタビューを行った人数が9人と少なく、また、考察においても「来る」の使用には個人差があり明確な基準があるわけではないとしており、使用実態の全体像が見えない結果となっている。

## 2. 3 山田敏弘 (1999)

山田敏弘 (1999) は、富山県における「行く」「来る」の用法についてより詳細な記述を行うことを第一の目的としている。また、方言文法の分野において、どのような記述方法を用いればより完全に近い形で記述することができるのか、富山方言の「行く」「来る」を題材として、方言文法の記述方法を模索している。その結果、方言的な用法における「行く」「来る」の違いを意識している特定のインフォーマントによる記述に加え、富山方言話者に対する対面調査および2つのバージョンによる延べ140名ほどに対するアンケート調査から数量的なデータを示している。

しかし、山田 (1999) は場面設定が統一的ではないため、本論文では山田 (1999) の場面設定を参考にしながら、大城 (2015) と同様の〈時間的観点〉、〈人間関係の観点〉、〈距離的観点〉に絞って統一的に検討を行うことにした。

## 2. 4 その他の先行研究

また、本論文を作成するにあたり、岸江信介 (1999) 「宮崎県方言の境界線を追って」、久野 (1978) 『談話の文法』、古賀悠太郎 (2012) 「日本語における話し手の視点—移動動詞「行く／来る」文を例に一」、陣内正敬 (1991) 「「来る」の用法と待遇表現」、森田良行 (1968) 「「行く」・「来る」の用法」を参照している。

以上が主要な先行研究であるが、陣内 (1996)、大城 (2015) に関しては、ともに調査対象者が少ないことが指摘できる。また、今回参考にした先行研究は肥筑方言、富山方言を対象としており、宮崎県の方言を扱ったものではない。

そこで本研究では、調査方法をアンケート調査とし、調査対象者の範囲を広げることで多くのデータを集め、より明確な基準を示すことができるようにしたい。また、先行研究で触れられていない「行く」「来る」の使用頻度の世代差・男女差についても考察する。

### 3. 調査方法

#### 3. 1 調査方法と調査範囲

調査方法は、アンケート調査を中心とすることにし、平成29年5月29日から平成29年11月6日にかけて、主に宮崎県日南市内で行った。今回調査を行った日南市は宮崎県の南部に位置し、都城市（諸県方言使用地域）、三股町（諸県方言使用地域）、串間市（日向方言使用地域）、宮崎市（日向方言使用地域）に隣接している。日南市は平成21年3月30日に南那珂郡南郷町、南那珂郡北郷町と合併しているが、旧南郷町・旧北郷町ともに日向方言使用地域内に位置している。

今回の調査では、10代、20代、30代、40代、50代以上の5つに世代を分け、各世代の男女それぞれ10人程度を対象にした。調査は主に下の図4における日向方言南部に分類されている地域で行った。ただし、そのうちの2人の回答者は、日向方言南部に居住しているものの、出身地域が日向方言中部・北部となっている。しかし、同じ日向方言に区分される地域であり、調査結果も他者と異なるものではなかったため、特に問題はないと考えている。

また、本調査では、5歳から12歳までの間に日向方言使用地域ではない地域で5年以上生活していた回答者においては、調査対象者としての基準を満たしていないと判断し、その回答結果をデータとして反映させていない。したがって、今回のアンケート調査では118名から回答を得たが、そのうち9名は調査対象者としての基準を満たしていなかったため、残りの109名の回答結果をもとに調査を進めることとした。

109名の男女の内訳は、男性が49名、女性が60名となっており、世代の内訳は、10代が31名、20代が20名、30代が19名、40代が19名、50代以上が20名となっている。



図4 調査実施地（黒の部分）（みやざき ひむか学ネットにおける画像を一部編集）

#### 3. 2 調査内容

今回のアンケートでは、時間・相手・場所など、会話における状況の差で「来る」という表現を使用する割合に差が出るのかを知るために、いくつかの要素を考慮して場面を設定し、日常生活で使用するような例文を作った。具体的には〈時間的観点〉・〈人間関係的観点〉・〈距離

(5)

的観点)の3つの観点を踏まえて質問を設定した。

〈時間的観点〉では【過去】・【今】・【一週間後】・【一ヶ月後】・【一年後】の5つを軸とする。〈人間関係の観点〉では【ウチ】・【ソト】を基本の観点とした。本論文においては、【ウチ】は二親等以内の人物、【ソト】は【ウチ】以外の立場にある人物と定義する。また、【ソト】については親疎および同等か目上かで区別した。よって〈人間関係的観点〉では【ウチ】・【ソト(親)(同等)】・【ソト(親)(目上)】・【ソト(疎)(同等)】・【ソト(疎)(目上)】の5つを軸とする。〈距離的観点〉では、【生活圏内(日南市内)】・【遠地(東京都内)】を軸とする。

具体的なアンケートの設問は以下のようなものである(以下の用例番号は、下の表1～表5の設問番号に対応している)。

(2) 〈あなたと東京にいる友達との電話での会話〉

友 達：来月、こっち(東京)で祭りがあるっちゃけど来ん？

あなた：行きたいー。友達と一緒に( 行っ / 来 )てもいい？

(4) 〈あなたが親しい友人との待ち合わせに遅れた時の電話での会話〉

親しい友人：もう商店街、着いちゃっよー。

あ な た：ごめん。寝坊した。今から( 行く / 来る )わ。

(7) 〈あなたとあなたが知らない店員との電話での会話〉

店 員：木曜日にご予約を承りました。

当店にいらっしゃったことはありますか。

あなた：はい、( 行った / 来た ) ことあります。

(19) 〈あなたとあまり親しくない友人との電話での会話〉

友 人：渡したいものがあるっちゃわ。

私、学校(職場)におけるっちゃけど、今から学校で(職場)会えん？

あなた：わかった、今から( 行く / 来る ) ねー。

(20) 〈あなたと普段から仲良くしている近所の年配の女性(年上)と道で出会った時の会話〉

年配の女性：来週、うちでお鍋やるからおいでよ。

あ な た：いいですね。学校(仕事)が終わってから

( 行き / 来 ) ますねー。

今回のアンケートでは〈時間的観点〉の5つの軸と〈人間関係的観点〉の5つの軸、〈距離的観点〉の【生活圏内】の軸を組み合わせた25問に加え、〈時間的観点〉の5つの軸と〈距離的観点〉における【遠地】の軸を組み合わせた5問、合計30問の質問を設定した。以上の内容をまとめると表1になる。

表1 実施アンケート中の質問項目における構成要素

			人間関係の観点					
			【うち】	【ソト(親)(同等)】	【ソト(親)(目上)】	【ソト(疎)(同等)】	【ソト(疎)(目上)】	
距離的 観点	【生活圏内】	時間的 観点	【過去】	設問1	設問28	設問24	設問16	設問7
		【今】	設問25	設問4	設問12	設問19	設問29	
		【一週間後】	設問15	設問26	設問20	設問11	設問5	
		【一ヶ月後】	設問21	設問6	設問18	設問13	設問27	
		【一年後】	設問9	設問30	設問14	設問23	設問3	
	【遠地】	時間的 観点	【過去】		設問10			
		【今】			設問8			
		【一週間後】			設問22			
		【一ヶ月後】			設問2			
		【一年後】			設問17			

### 3. 3 分析方法

本論文では、調査から得られた回答から日向方言における「行く」と「来る」の使用状況を可能な限り客観的に推測するために統計的な分析を試みた。今回は、プロビット分析とマクネマー検定を用いて、各設問間において統計的に差があると言えるかを調べた。

〈人間関係的観点〉を軸とした〈時間的観点〉における「来る」を使用する割合の差、および〈時間的観点〉を軸とした〈人間関係的観点〉における「来る」を使用する割合の差についての分析にはプロビット分析を用いた。この分析を行うことによって、日向方言において、〈時間的観点〉によって「来る」を使用する割合にどのような差があるのか、〈人間関係的観点〉によって「来る」を使用する割合にどのような差があるのかを統計的に推測することができる。

一方、〈時間的観点〉および特定の〈人間関係的観点〉を軸とした〈距離的観点〉における「来る」を用いる割合の差の分析では、対応のある2グループを対象とするため、マクネマー検定を用いた。この分析によって、日向方言では〈距離的観点〉の違いによって「来る」を使用する割合が異なるかについて統計的に推測することができる。

本研究では、これらの分析に統計解析ソフトR（バージョン3.4.1）を用いた。以下では、これによって解析した統計的分析において有意であるという結果が出たものを中心に考察している。

### 4. 調査結果と考察

各設問における回答の内訳を以下の表2に示す。なお、特定の設問において、「行く」と「来る」のどちらも選択していない回答（無回答）、またはどちらも選択している回答（二重回答）が若干見られた。そのため、この無回答、二重回答は無効とし（具体的な設問箇所については次の表2で「無効」として示している）、集計の際には全体数の中に入れなかった。しかし、本論文では設問ごとに「行く」「来る」の割合を出し、それによって考察を行っているため、特に問題にはならないと考える。以下では、出された割合をもとに〈時間的観点〉・〈人間関係的観点〉・〈距離的観点〉の3つの観点から考察する。

(7)

表2 アンケートにおける回答内訳

	人数(割合)		人数 無効		人数(割合)		人数 無効
	行く	来る			行く	来る	
設問1	77(71%)	32(29%)		設問16	93(86%)	15(14%)	1
設問2	89(82%)	20(18%)		設問17	102(94%)	7(6%)	
設問3	106(97%)	3(3%)		設問18	98(90%)	11(10%)	
設問4	94(86%)	15(14%)		設問19	90(83%)	19(17%)	
設問5	104(95%)	5(5%)		設問20	96(88%)	13(12%)	
設問6	96(88%)	13(12%)		設問21	84(77%)	25(23%)	
設問7	77(71%)	32(29%)		設問22	99(91%)	10(9%)	
設問8	92(84%)	17(16%)		設問23	101(93%)	8(7%)	
設問9	96(88%)	13(12%)		設問24	87(82%)	19(18%)	3
設問10	78(72%)	31(28%)		設問25	86(79%)	23(21%)	
設問11	97(89%)	12(11%)		設問26	87(80%)	22(20%)	
設問12	98(90%)	11(10%)		設問27	105(96%)	4(4%)	
設問13	94(88%)	13(12%)	2	設問28	79(72%)	30(28%)	
設問14	105(96%)	4(4%)		設問29	103(95%)	5(5%)	1
設問15	85(78%)	24(22%)		設問30	93(85%)	16(15%)	

## 4. 1 〈時間的観点〉における「来る」の使用頻度の違い

〈時間的観点〉における「来る」の使用頻度の差を明らかにするために、特定の〈人間関係的観点〉を軸にして〈時間的観点〉を比較していく。その結果の一例として、4. 1. 1において【ウチ】を軸とした場合の分析、考察を示す。

## 4. 1. 1 【ウチ】を軸とした場合

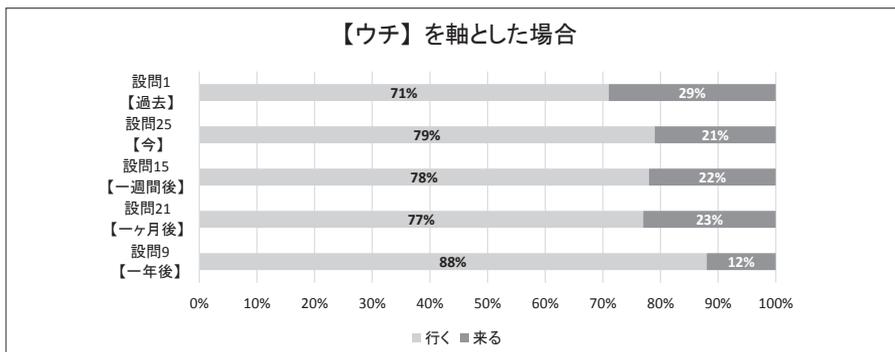
【ウチ】を軸として〈時間的観点〉を比較するために、設問1（【ウチ】×【過去】）、設問25（【ウチ】×【今】）、設問15（【ウチ】×【一週間後】）、設問21（【ウチ】×【一ヶ月後】）、設問9（【ウチ】×【一年後】）を検討する。この分析部分を示すと、表3の網掛け部分になる。

表3 〈人間関係的観点〉における【ウチ】を軸とした場合の分析部分

		人間関係的観点						
		【ウチ】	【ソト(親)(同等)】	【ソト(親)(目上)】	【ソト(疎)(同等)】	【ソト(疎)(目上)】		
距離的 観点	【生活圏内】	時間的 観点	【過去】	設問1	設問28	設問24	設問16	設問7
		【今】	設問25	設問4	設問12	設問19	設問29	
		【一週間後】	設問15	設問26	設問20	設問11	設問5	
		【一ヶ月後】	設問21	設問6	設問18	設問13	設問27	
		【一年後】	設問9	設問30	設問14	設問23	設問3	
	【遠地】	時間的 観点	【過去】		設問10			
		【今】		設問8				
		【一週間後】		設問22				
		【一ヶ月後】		設問2				
		【一年後】		設問17				

(8)

各設問の「来る」を使用する割合は、グラフ1のように、設問1【過去】が29%、設問25【今】が21%、設問15【一週間後】が22%、設問21【一ヶ月後】が23%、設問9【一年後】が12%となった。



グラフ1 【ウチ】を軸とした場合

以上5つの各設問を比較してみると、【過去】における「来る」の使用頻度が最も高いことが分かる。【過去】に続いて「来る」の使用頻度が高いのは【一ヶ月後】である。【一年後】で「来る」を使用する割合はかなり減少し、【過去】における割合の約3分の1となっている。

#### 4. 1. 2 〈時間的観点〉における全体の傾向

〈時間的観点〉における全体の傾向としては、統計的に有意であるとの結果が【過去】において多く見られた。これより、全体的に【過去】において「来る」を使用する割合が高いのではないかと推測される。一方、【一年後】は他の時間的観点に比べると「来る」の使用率が低い。【過去】と【一年後】を比べてみると、多くのグラフで【過去】の方が「来る」を用いる割合が高いことが分かる。以上のことから、〈時間的観点〉に基づくと、【過去】の要素が含まれる場面では「来る」、【一年後】の要素が含まれる場面では「行く」を多用する傾向にあると言える。

また、統計的な分析結果からは、はっきりと有効な差がでなかったが、本研究の回答結果の傾向から、「来る」を使用する割合は

【今】  
【過去】 > 【一週間後】 > 【一年後】  
【一ヶ月後】

のように変化していると考えられる。

#### 4. 2 〈人間関係的観点〉における「来る」の使用頻度の違い

〈人間関係的観点〉における「来る」の使用頻度の差を明らかにするために、特定の〈時間

的観点)を軸にして〈人間関係の観点)を比較していく。その結果の一例として、4. 2. 1において【今】を軸とした場合の分析、考察を示す。

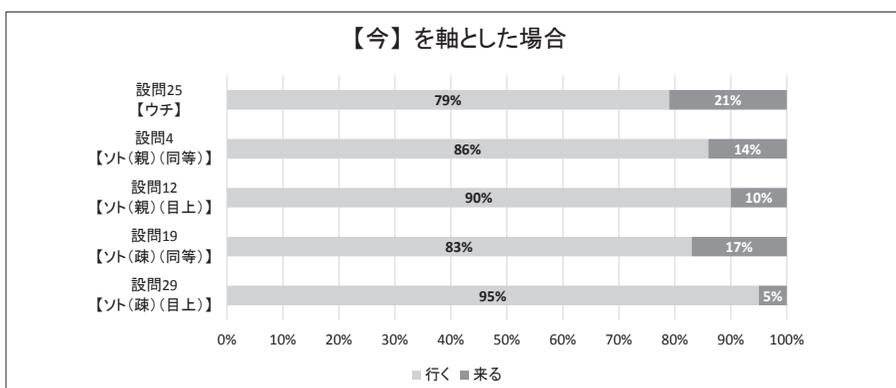
#### 4. 2. 1 【今】を軸とした場合

【今】を軸として〈人間関係の観点)を比較するために、設問25 (【今】×【ウチ】)、設問4 (【今】×【ソト(親)(同等)】)、設問12 (【今】×【ソト(親)(目上)】)、設問19 (【今】×【ソト(疎)(同等)】)、設問29 (【今】×【ソト(疎)(目上)】)を検討する。この分析部分を示すと、表4の網掛け部分になる。

表4 (時間的観点)における【今】を軸とした場合の分析部分

		人間関係の観点					
		【ウチ】	【ソト(親)(同等)】	【ソト(親)(目上)】	【ソト(疎)(同等)】	【ソト(疎)(目上)】	
距離的 観点	【生活圏内】	【過去】	設問1	設問28	設問24	設問16	設問7
		【今】	設問25	設問4	設問12	設問19	設問29
		【一週間後】	設問15	設問26	設問20	設問11	設問5
		【一ヶ月後】	設問21	設問6	設問18	設問13	設問27
		【一年後】	設問9	設問30	設問14	設問23	設問3
	【遠地】	【過去】		設問10			
		【今】		設問8			
		【一週間後】		設問22			
		【一ヶ月後】		設問2			
		【一年後】		設問17			

各設問の「来る」を使用する割合は、グラフ2のように、設問25【ウチ】が21%、設問4【ソト(親)(同等)】が14%、設問12【ソト(親)(目上)】が10%、設問19【ソト(疎)(同等)】が17%、設問29【ソト(疎)(目上)】が5%となっている。



グラフ2 【今】を軸とした場合

以上5つの各設問を比較してみると、【ウチ】の次に高い割合で「来る」を使用しているのが【ソト（疎）（同等）】である。その【ソト（疎）（同等）】に比べて若干低い割合で「来る」を使用するのが【ソト（親）（同等）】であり、このことからソト内の親疎は関係なく、（同等）なのか（目上）なのかで「来る」を使用するかが判断されている可能性があると言える。

また、同じ（同等）であれば、グラフ2では、他の傾向と異なり、【ソト（親）】よりも【ソト（疎）】の方が「来る」を使用する割合が高かった。この【ソト（疎）】が【ソト（親）】よりも高い割合で「来る」を使用する原因として、場所が関わっている可能性が考えられる。【ソト（疎）】の要素が含まれる設問19（p.5を参照）では学校（職場）、【ソト（親）】の要素が含まれる設問4（p.5を参照）では商店街を場所として設定しているが、日常生活において滞在時間の長い学校（職場）の方が商店街よりも場所としての親しみがあり、「来る」を使いやすいのではないかと考える。

#### 4. 2. 2 〈人間関係的観点〉における全体の傾向

〈人間関係的観点〉においては、全体的に【ウチ】において「来る」を使用する割合が高い傾向にあることが分かった。また、それぞれの結果から、単純に親疎を基準として「来る」を使用している訳ではない可能性が明らかになった。

つまり、【ウチ】・【ソト】と（親）・（疎）といった判断材料の間に、（同等）・（目上）という要素が入り込んでおり、【ウチ】・【ソト（親）（同等）】・【ソト（疎）（同等）】・【ソト（親）（目上）】・【ソト（疎）（目上）】の順で「来る」を使用しやすいと考えられる。

まとめると、〈人間関係的観点〉において「来る」を使用する判断の優先順位が

- ① 【ウチ】 > 【ソト】
- ② （同等） > （目上）
- ③ （親） > （疎）

になっている可能性があるということが分かった。

以上から、本研究によって【ソト（親）】と【ソト（疎）】のような【ソト】内における親疎の関係より、（同等）か（目上）かが重要な判断基準となっている可能性があるということが明らかになったと言える。「来る」を使用する判断基準において親疎よりも年齢が重視される傾向にあるということであり、また、敬語を使わない間柄において「来る」を使いやすいのではないかと考えられる。

#### 4. 3 〈距離的観点〉における「来る」の使用頻度の違い

〈距離的観点〉における「来る」の使用頻度の差を明らかにするために、特定の〈時間的観点〉、〈人間関係的観点〉を軸にして〈距離的観点〉を比較していく。その結果の一例として、4. 3. 1において【一週間後】・【ソト（親）（同等）】を軸とした場合の分析、考察を示す。

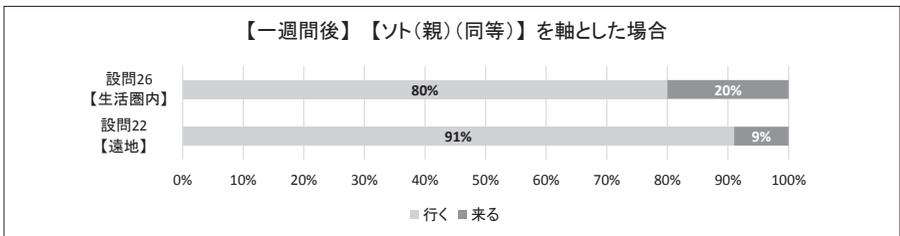
#### 4. 3. 1 【一週間後】・【ソト(親)(同等)】を軸とした場合

【一週間後】・【ソト(親)(同等)】を軸として〈距離的観点〉を比較するために、設問26(【一週間後】×【ソト(親)(同等)】×【生活圏内】)、設問22(【一週間後】×【ソト(親)(同等)】×【遠地】)を検討する。この分析部分を示すと、表5の網掛け部分になる。

表5 〈時間的観点〉における【一週間後】・〈人間関係的観点〉における【ソト(親)(同等)】を軸とした場合の分析部分

		人間関係的観点					
		【ウチ】	【ソト(親)(同等)】	【ソト(親)(目上)】	【ソト(疎)(同等)】	【ソト(疎)(目上)】	
距離的 観点	【生活圏内】	【過去】	設問1	設問28	設問24	設問16	設問7
		【今】	設問25	設問4	設問12	設問19	設問29
		【一週間後】	設問15	設問26	設問20	設問11	設問5
		【一ヶ月後】	設問21	設問6	設問18	設問13	設問27
		【一年後】	設問9	設問30	設問14	設問23	設問3
	【遠地】	【過去】		設問10			
		【今】		設問8			
		【一週間後】		設問22			
		【一ヶ月後】		設問2			
		【一年後】		設問17			

各設問の「来る」を使用する割合は、グラフ3のように、設問26【生活圏内】が20%、設問22【遠地】が9%となっている。



グラフ3 【一週間後】【ソト(親)(同等)】を軸とした場合

以上2つの設問を比較してみると、【生活圏内】よりも【遠地】の方が「来る」を使用しにくいことが分かる。【遠地】における「来る」を使用する割合は【生活圏内】の約2分の1に留まっている。

#### 4. 3. 2 〈距離的観点〉における全体の傾向

〈距離的観点〉における全体の傾向としては、比較した5つのグラフのうち、統計的に有意な差が認められたグラフは2つであり、いずれも「来る」を使用する割合が【生活圏内】>【遠地】という結果になった。その他のグラフは統計的に有意な差は認められなかったものの、「来

(12)

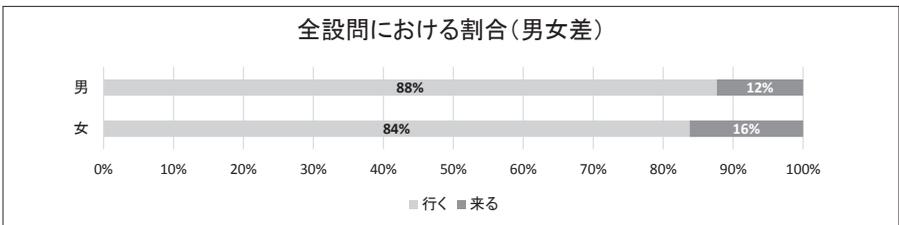
る」を使用する割合が【生活圏内】 = 【遠地】であるグラフが2つ、【生活圏内】 < 【遠地】であるグラフが1つあった。

〈距離的観点〉が「来る」の使用頻度に影響を与えるという先行研究もあったが、今回の調査では、〈距離的観点〉の差が「来る」の使用率に関係してくると断定はできなかった。しかし、筆者の内省においては、【遠地】よりも【生活圏内】の方が「来る」を使用しやすい傾向にある。また、5つのグラフのうち、有意な値を示した2つのグラフにおいては「来る」を使用する割合が【生活圏内】 > 【遠地】となっていることから、〈距離的観点〉における「来る」を使用する割合は【生活圏内】 > 【遠地】となっている可能性がある。

さらに、自由記述欄も今回のアンケートでは設けたが、そこでの回答者の意見として、〈距離的観点〉によって「来る」の使いやすさが変わってくると言及されていた。今回、全体としての明確な結果は出なかったものの、ある一定数の個人は〈距離的観点〉を「来る」を使用する基準の一つとして認識していると言える。

#### 4. 4 男女差における使用頻度の違い

また、各設問で「来る」を使用すると回答した割合が、男女差によって変化するのも検討を行った。ここでは、全設問における「来る」の使用頻度の男女差をグラフ4に示す。

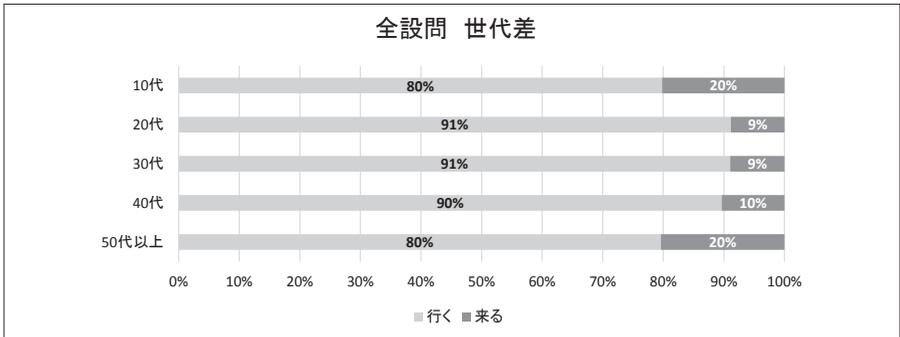


グラフ4 全設問 (男女差)

結果として、多くの設問、また、グラフ4の全設問の「来る」を使用する割合において男女間で大きな差は見られなかった。男女によって「来る」を使用する割合に差が出るとは言いきれない結果となった。

#### 4. 5 世代差における使用頻度の違い

次に、各設問で「来る」を使用すると回答した割合が、世代差によって変化するのかを検討する。ここでは、全設問における「来る」の使用頻度の世代差をグラフ5に示す。



グラフ5 全設問（世代差）

世代別に見ると、特に10代と50代以上の「来る」の使用頻度が高かった。10代の「来る」の使用頻度が高いのは、日向方言を使用する地域以外で生活したことがなく、「行く」ではなく「来る」を使用する方言ならではの用法に違和感を覚えにくい環境にいるからではないかと考えられる。その一方で、筆者の予想に反して20代の「来る」の使用頻度が低い傾向が見られた。20代の調査対象者は、その多くが一度県外に出て生活していることもあり、「行く」「来る」の使い分けを無意識に変化させていった可能性があると考えられる。

## 5. まとめ

本論文では、以上のように〈時間的観点〉、〈人間関係的観点〉、〈距離的観点〉を用い、これらによって「来る」を使用する割合に差が見られるかを調べてきた。

〈時間的観点〉では、特に【過去】を含む場面において「来る」が多く使用されることが明らかとなった。対して、【一年後】において「来る」を使用しにくい傾向にあることも分かった。筆者の内省では【過去】と【今】における「来る」の使用頻度が高かったのだが、今回の調査では特に【過去】において「来る」を使いやすい傾向にあると言える。

〈人間関係的観点〉では、特に【ウチ】において「来る」を使用する割合が高い傾向にあることが明らかとなった。また、単純に親疎を基準として「来る」を使用している訳ではなく、【ウチ】か【ソト】の基準の次に重要になるのが（同等）か（目上）かの基準である可能性があることが分かった。つまり、【ウチ】、【ソト（親）（同等）】、【ソト（疎）（同等）】、【ソト（親）（目上）】、【ソト（疎）（目上）】の順で「来る」を使用しにくくなる可能性を含んでいる。【ソト（親）】と【ソト（疎）】のような【ソト】内における親疎の関係より、（同等）か（目上）かが重要な判断基準となっている可能性があることは注目すべき点である。

また、〈距離的観点〉については、「来る」の使用頻度に影響を与えるという先行研究もあったが、今回の調査では、〈距離的観点〉の差が「来る」の使用率に関係してくると断定はできなかった。しかし、有意な値を示したグラフにおいては「来る」を使用する割合が【生活圏内】>【遠地】となっており、〈距離的観点〉における「来る」を使用する割合は【生活圏内】>【遠地】となる可能性も考えられる。同様に、筆者の内省でも〈距離的観点〉が影響していると思

われるものもあり、自由記述欄における意見の中にも、〈距離的観点〉によって「来る」の使いやすさが変わってくると言及されている。以上のことから、今回、全体としての結果は出なかったものの、ある一定数の個人は〈距離的観点〉を「来る」を使用する基準の一つとして認識している可能性が高いと考える。

さらに、本論文では、「来る」を使用する頻度に男女差・世代差があるかも調べた。結果として、男女間において使用頻度に差があるとは言えなかったが、世代間においては大きな差が見られた。世代別に見ると、特に10代と50代以上の「来る」の使用頻度が高かった。10代の「来る」の使用頻度が高いのは、日方向言を使用する地域以外で生活したことがなく、方言ならではの用法に違和感を覚えにくい環境にいるからではないかと考える。また、筆者の予測では20代も「来る」の使用頻度が高いとしていたのだが、今回の結果ではそのような傾向は見られなかった。調査対象である20代は、その多くが一度県外に出て生活していることもあり、「行く」「来る」の使い分けを無意識に変化させていった可能性があると考えられる。

## 6. 今後の課題

今回の調査では30個の設問を設定したが、設問のなかには、他の設問と比べて「来る」と回答される割合が高いものがいくつか見られた。特に、設問7（p.5を参照）においては〈人間関係の観点〉から見ると「来る」と答えにくい可能性が高いのにも関わらず、多くの回答者が「来る」を使用すると答えた。設問7を除く全設問で「行く」を選択していた回答者が、設問7のみ「来る」と回答していることから、設問7には〈時間的観点〉や〈人間関係の観点〉のほかに何か影響を与えているものが存在すると考えられる。設問7での場面設定においては、相手がいる場所に自分が行ったことがあるということを相手に伝えるのだが、何度か行ったことのある場所であれば、場所そのものに対して親密感を覚え、「来る」を使用することができる可能性もある。〈時間的観点〉・〈人間関係の観点〉・〈距離的観点〉に絞って今回の調査を行ってきたが、場所に対する心理的な近さが「来る」を使用する基準に影響を及ぼす可能性も見えてきた。以上のように設問7で見られた新たな観点の存在を明らかにするために、仮説を再検討するとともに質問内容を改訂し調査を行うことが今後の課題として挙げられる。

また、本研究における調査では118名に対してアンケート調査を行い、109名分の有効な回答を得た。先行研究と比べると、比較的多くのデータを収集できたと思われるが、統計的に分析するにあたっては、調査対象者数が少なく、職種や地域等に偏りが見られるなどの問題点も残った。調査範囲を拡大するとともに偏りのないデータ収集に留意すること、多くのサンプルを集めるために調査対象者数を増やすことが今後の課題であると考えられる。

## 【参考文献】

- 岩本実 (1983) 「宮崎の方言」『講座方言学』、国書刊行会、pp.267-293
- 大城玲奈 (2015) 「視点と言語表現—移動動詞「行く/来る」の使い分けについて—」『東京女子大学言語文化研究』23巻、東京女子大学言語文化研究会、pp.36-51
- 岸江信介 (1999) 「宮崎県方言の境界線を追って」『言語文化研究』6巻、徳島大学総合科学部、pp.229-275

久野暲 (1978) 『談話の文法』、大修館書店

古賀悠太郎 (2012) 「日本語における話し手の視点—移動動詞「行く/来る」文を例に一」『神戸市外国語大学研究科論集』15巻、神戸市外国語大学大学院外国語学研究科、pp.1-20

陣内正敬 (1991) 「「来る」の用法と待遇表現」『国語学』167巻、国語学会、pp.90-82

陣内正敬 (1996) 『北部九州における方言新語研究』、九州大学出版会、pp.43-52

藤井良宜 (2010) 『Rで学ぶデータサイエンス1 カテゴリカルデータ分析』共立出版

森田良行 (1968) 「「行く・来る」の用法」『国語学』、国語学会、pp.75-87

山田敏弘 (1999) 「富山方言における「行く」「来る」の用法について」『富山国際大学紀要』、pp.59-73

### 【参考Web】

日南市・北郷町・南郷町合併協議会 <http://www.city.nichinan.lg.jp/gappei-nkn/>  
2018年1月7日

日南市ホームページ <http://www.city.nichinan.lg.jp/main/> 2018年1月7日

宮崎県教育情報通信ネットワークホームページ みやざきひむか学ネット「宮崎の方言」  
[http://www.miyazaki-c.ed.jp/himukagaku/unit/yume\\_05/page3.html](http://www.miyazaki-c.ed.jp/himukagaku/unit/yume_05/page3.html) 2017年10月30日

(みずもと・あかり)